



＜サイトへ戻る＞

12年ぶりの執筆 月刊「へら鮎」2020年8月号

内会でも競技をするのが当たり
1995年の「シマ
に迫ったかです。例
広義では管理釣り場のこ
でも野釣り場でも、
でも野釣り場のこ
でも野釣り場のこ

2020年7月13日・仕事,へら釣り

月刊「へら鮎」での「江成公隆のトーナメンター、復活への道。」が
終わってから12年。久々に紙媒体に寄稿しました。
今回はライバル誌である「へら専科」の記事ですが、まったく接点
がなかった訳ではありません。実は表紙にもなったことがあります
し、カラーの企画にも出演したことはあります。ただ、書いたのは
初めてでした。この件については会社のブログにも書きましたし、
Facebookにも書いたので、ここでは裏話的な話を書きます。

僕は、現存するへらブナ釣り雑誌すべての編集部知り合いがいま
す。凄い友人がいるからって自分も凄い訳じゃないのは百も承知な
ので、お友達自慢をする気は更々ないですが、有名トーナメンター
やインストラクターだけじゃなく、つくづく恵まれた環境で釣りを
してきたんだと思えましたね。

へら専科の編集長K氏とは20代の頃に知り合い、共通の友人H氏を通
じてたまに飲むような関係になったのはここ5年くらいですが、「い
つか書かせてくれ」なんていう色気は全くありませんでした。今回
いっしょに仕事した彼の部下の皆さんを紹介されたのは2年ほど前
ですが、その時も全く色気はなかったですね。本当です。

そもそもSNSがこれだけ浸透した時代に、自分の意見を発信するの
に紙媒体である必要はない、と感じていました。タイムリーな情報
を出したい時にすぐ出せるスピード感。スペースも字数も関係ない
自由さ。紙媒体が敵う筈はありません。それでも、誰でも出られる
訳じゃない紙の重みはあるんだなと、今回あらためて感じたのでし
た。

イマ、本に出ている人

僕が主宰するナリーズというクラブには、過去のスーパースターG氏
が在籍しています。いろいろあったんでしょうね。派閥を追われ、
人間関係に疲れ、ひっそりと釣りを楽しんでたその彼が、ひょん
なことからナリーズ入り。全く衰えていない腕前で、ナリーズのアイ
ドルであり今や全国にその名を轟かせるトーナメンター伊藤泡舟氏
を脅かすこととなりました。

過去を知っている僕からすれば、G氏は泡舟氏と並んで二大看板に
なるのは判りきっていましたが、過去を知らない会員には理解でき
ない訳です。月例会で、「どこの馬の骨…」が憧れの泡舟氏の頭を
押さえる。熱心な泡舟ファンには許せない事態だったのでしょう。
なんとって唯一無二のクラブの誇りですからね（笑）

時間の経過とともに、G氏は受け入れられていきます。それでも、
「どこの馬の骨…」から「けっこう釣る人」への格上げ程度でした
（笑）メジャートーナメントの上位常連で、紙媒体にもちょいちょ
い出ている泡舟氏の立場は崩れません。泡舟氏自身が彼を認め、積
極的に情報交換をするようになっていてもです。

そんなG氏の転機は、昨年訪れました。2019G杯全国大会出場。惜
しくも準決勝で散りますが、「イマ、本に出ている人」になったの
です。「その人の釣りの上手さ、凄さ」を理解するには、評価者の
釣りもある程度のレベルに達している必要があります。自分の尺度
に自信がなければ、「他人の誰か」の尺度が必要なんですね。

それが即ち「媒体」ですが、世の中ってそういうものですよ。肩
書や学歴に拘るのも同じです。もっとも、学歴は「イマ」ではなく
過去ですけどね。バックナンバーを漁ってもらえば、G氏の凄さも
すぐに解った筈なんです。そこまでするのは面倒くさいのでしよ
う。遊びですから。

今回、僕も「イマ、本に出ている人」の仲間入りを果たしました。
だから凄いだろウオレって！とは思いますが（笑）ミーハーな会
員が嬉しいなら、それはそれで僕も幸せなんです。過去記事のコピ
ーを渡しても、Facebookにノーガキを書いても、「長いから読む気
になりません😅」とのたまう会員が、今回はサクッと全10ページを
読み切ってますからね。僕自身、有名な箕輪厚氏と同じ本に載っ
てるのは悪い気がしませんでした。釣りをしない彼の起用には賛否
あるようですよ。

まさかの立候補

さきほど「書きたい」色気はなかったと言いましたが、今回は別で
した。対談の企画を聞かされた時、「それは僕にやらせてよ」と言
ったのが事実です。なぜそう感じたかは、8月号本文に書きましたの
で読んでいただければと思います。まあ書かせると言って本当に任
せる編集長もアレですけど、即答ではなかったですよ。昼に企画を
聞かされ、夕方に再度の電話があるまで、笑い話だと思っていまし
た。

今回、仕事として会社で請けていますので、当然ギャラは発生して
います。ボリュームも過去にないほどなので、今までいただいたこ
とのある原稿料よりは高額でした。相場は知りませんが（笑）
でもそれは二の次で、正しいことかどうかは別としても、やりたい
仕事をやらせていただける喜びが大きかったですね。友人からの
「安売りするな」という忠告は、耳に入りませんでした。

会社のウェブの事業内容にライティングが謳われている以上、もっ
とガッツいても良いのかもかもしれませんが、あくまで今回はイレギュ
ラーです。ではなぜ事業内容に載せるのか？と疑問に思われるかも
しれませんが、釣り関連なら「仕事は選びません」ということ
です。なんとしてでも会社を存続させたい気合の表れ、と理解して
いただければと思います。

たしかにポータルサイトとしても必要と感じて始めた当サイトです
が、あくまでも「オファーがあれば請ける」というスタンスなので
す。書くことは好きですが、僕はとある元編集者にボロカス言われ
てますし、そんなに自分の文章に自信ないですから。それを一本目
の仕事から覆してしまったことは不本意です。

字数はともかく、締切はオーバーすること無く入稿。その後、編集
部の手による校正一回目の原稿を読み、文体が随分変わったなあ、
という印象を持ちました。「へら鮎」時代にはここまで弄られた記
憶はないのですが、それが「へら専科」の流儀なんだろうと納得さ
せていました。17,000字から14,000字に詰める必要があったよう
なので無茶も理解できましてし、前述の元編集者も「へら専科」編
集部にかかれればボロカスですからね。そのボロカスから、僕はボロカ
スと言われている訳ですから。そりゃもう、最上位の編集部様の判断
は絶対です（笑）

それに、その元編集者と同一視されたくないという意欲も働きました
。ボロカスなのに「自信過剰で粘着質」...実際にどの程度かは知
りませんが、イタイじゃないですか。そんなふうに言われては。な
ので、「へら鮎」編集長には、「今まで甘やかしてくれてありがと
う」という感謝の言葉を添えて、他誌執筆の報告メールを打ちまし
た。

でも最終の校正を経た原稿を見て、「これはもう僕の文章じゃな
い！」と、ひと暴れました。結局文句言うなら最初から言えよ
って感じですよ（笑）その後、編集部の用意した最終稿をベー
スに、江成流のアレンジを加えていくという謎の作業が発生しまし
た。すでに写真のレイアウトも決まっているので、文字数を揃える
必要があるという無理ゲー。なんとかクリアできたと思いますが、
いかんせん時間が足りずに修正漏れした部分もあります。まあ、全
体に影響を与えるような致命的なミスは残っていません。自分で書
いたと言える文章に戻っています。もし次回があるなら、もう少し
正確な字数でオーダーいただきたいです（笑）

自信過剰と自己肯定の狭間で

寄稿は12年ぶりとなりましたが、仕事でここ一年ほど毎月やって
いる動画編集も、文章執筆と同じだなと感じています。構成を考
えてテロップを入れる作業に使う脳みそは、間違いなく同じ部
位を使っていますね。一年前の動画は恥ずかしくて観られない
ですが、作った時点では「ドヤ！」という自信があったんです。
笑っちゃいますけどね。でも、そのくらい自信持って出せる
ほどの情熱がないと作れないものなんです。情熱を注いで
作ったモノに、自信が持てないのはおかしい訳です。手
を抜きたい加減なモノを出すわけにはいかない、という
思いですね。

あるエゴ漫画家が、描いた自分でカケなければニセモンだ
と言っていました。なんとなくそれ、わかるんですよ。ただ
それを、読者に押し付けちゃったらマズいだけで。自己を
切り取るにはどうしても他人という存在が必要で、純粋に
自己完結はしないと思います。過剰であっても他人に迷
惑をかけない自信で自己満足できるのであれば、問題
ないと思います。

適度な自信は向上心を摘みません。なので、「これ以上の情熱を傾
けられるだろうか？」という「自信（からの不安）」も、
杞憂に終わります。毎回毎回同じことを思うのが正しい
サイクルです（笑）「その時々で精一杯やった」ことは
事実でも、ちゃんと過去になっていきます。裏を返せば、
「これ以上の情熱を傾ける余地はあったやんw」とい
うことになるのですが、それで良いのです。ちゃんと
過去にならない人が、ヤバい人なんですよ。成長でき
ませんもんね。

人間は黒歴史の積み重ねの上に生きています。やっちゃった過去は
消せませんから、適度に自己肯定するしかないんですよ。
それは無反省とは違います。よほどのことがない限り
取り返しのつかない失敗などなく、やり直しができる
世の中であるべきだと思います。他者に対してでも
です。

7/11下書きが意図せず公開されていました😅
7/13加筆して正式公開